

第2回学ぶ喜び・ESD 連続公開講座 概要報告

- ◇開催日時 平成 29 年 7 月 5 日（水）19 時～20 時 30 分
◇会場 次世代教員養成センター2 号館 多目的ホール
◇参加者数 55 名
◇ゲストスピーカー
吉田剛氏（奈良市立済美小学校教諭）、鈴木ひかる氏（奈良女子大学 4 回生）

◇内容

趣旨説明：奈良教育大学 准教授 河本大地（以下河本）

原発に対する思いは、一人ひとり違うし、政治的になりがちだ。しかし、エネルギー問題は避けて通れない問題だ。原発事故を通して考える機会をもつことが大切だと思う。一人ひとりが考える機会にしてほしい。

1. 震災発生時の様子



吉田：

福島県檜葉町で講師をしていた。原発から 15 キロ～20 キロ。そこは故郷でもあった。4 年生の担任をしていた。2 日前にも大きな地震があった。

3 月 11 日の 2 時 46 分は、ちょうど子どもたちは帰る用意をしていた。避難訓練通りに避難し始めたが、揺れがなかなかおさまらない。だんだん子どもも不安になり、泣き出す子もいた。揺れがおさまったので、全員で運動場に避難した。雪がちらつき、寒かった。

名簿でチェックしながら、迎えが来るのを待つことになった。携帯が繋がらない。停電していた。状況がまったくつかめない。人々が集まってきて、「家が流されてしまった」「道路は崩壊し、渋滞して通れない」等の情報が人づてに伝わってきていた。

迎えに来てもらえない子もいたので、隣の避難所になっていた体育館に子どもを連れて行った。夜になって、映像を見て、はじめて、津波の被害があったことがわかった。自分の子ども（幼児）は置いたままだった。その夜は実家に泊まった。

原発のあった大熊町の病院に勤めていた父親から夜中に電話があった。「原発が危ないらしいので、自分の判断で避難してほしい。」

朝、消防団が回っていた。「原発が危ないことになっているらしい。とにかく南に逃げてください。」

公的な情報は何もなかったが、誰もが南に逃げていた。いわき市の親戚の家に向かった。風のうわさをたよりに避難所に向かう人もいた。浜通りを南に行くと、沿岸部の道路が壊れていた。何とか親戚の家につき、手を洗ったことが忘れられない（ストレスがすーっと流れていくように感じた）。

親戚の家と言っても長居できるわけでもないで、今度は茨城県の親戚の家に向かった。その後、原発の事故が明らかになり、妻と息子を山口県に避難させた。両親は、茨城県内に家を借りた。私は、4 月から会津若松市内の学校勤務が決まっていたので、その近くに住むことになった。



鈴木：

中学3年生だった。南相馬市の中学校に通っていた。関西ではどのような報道がなされていたのか、知らなかった。卒業式だった。その日は、人生で一番泣いた日（卒業式で泣いた。大きな地震があつて、この世は終わると泣いた）。

車の中にいて、地震を感じた。情報が何もなかった。原発からは、32キロ程度、津

波もあった地域だった。吉田先生は南に逃げたと言われた。私は北に逃げた。福島県は地理的に西か北にしか行けない。

13日の朝、避難した。でも、指示はなく、自主避難という形だった。逃げる判断が難しかった。

原発から10キロの人は逃げなさい。次は20キロの人も逃げなさいという報道があつた、自分の位置がどれくらい離れていたのかがわからず、混乱があつた。食べ物が入って来なくなる、ガソリンがなくなる、遅れると逃げられなくなる、など、様々な情報で混乱していた。携帯等で、情報を集めて、避難先を探した。

2. 避難について

鈴木：

親戚の家に、ずっといられるわけではない。いくら親戚だといっても、だんだんぎすぎすしてくるところがある。山形の体育館に避難した。山形に避難してくる人が結構いた。そこでは、「東北は終わりだ」という声も聴かれた。

次に、九州の福岡に逃げた。そこでは被災地とそうでない土地のギャップを感じ、落ち着かなくなり、戻るという決断をした。

原発のことで、避難先でも阻害されるという感じがあつた。

家に戻れない。どこに行ったらいいかわからない。家があるのに戻れない。見えないものに汚染されたという、家を流されたという目に見える被害を受けている方と、放射線という目に見えない被害を受けた者との違いを感じた。例えば、放射能を持ち込まれたくないという思いからだろう、福島ナンバーの車は入ってこないでくれ、被ばく量を検査していないなら入ってくるな、洗い流してからこい、という声も聞かれた。

吉田：

何回か検査をした。勤務先の会津若松市に行くときにも、「必ず、スクリーニングの検査をしてください」と言われた。でないと来てはいけない。体に放射線をつけてきてしまう。それを持ち込まないでくれという意味だ。車も検査をして、検査済みの文書を持っていることが必要とされた。

鈴木：

避難所入口で検査があつた。

河本：

(地図を用いての位置関係の説明)

鈴木：

ギャップを感じたのは、ニュース報道の内容が影響していると思う。福島では、現地の人に密着し

た内容だと思ったが、九州では、被災者に寄り添っていないと感じた。やっぱり外から見ているという感じで、責任はどこにあるとか、被災していない視聴者の関心のあるものを放送していると思った。私が知りたい放射線に関する情報はあまりなかった。風評被害をあおるような内容も多かった。

吉田：

最初は感じがいい。だんだん時間が経つ内に、「してもらうことが当たり前」という感じで振舞う人もいたのかもしれない。お金をもらって、昼間からパチンコをしている人も確かにいた。あいつらは、せっかく迎え入れてやっているのに態度が悪い、警戒区域から来た者は帰れ、という声もあった。肩身が狭い思いをした。

例えば、新しい学校をつくるにあたって、色々な業者が寄付をしてくれたが、数か月後に「あんなに寄付してやったのに、なんでうちから買わないんだ。」という電話もあった。

自分の妻と息子は7月まで山口にいたが、気まづくなり、愛知県に受け入れてくれる公営の住宅があると聞き、移動した。9月には茨城に移動した。家族がばらばらに生活した。週末だけ、家族が集まるという生活が1年間つづいた。

鈴木：

私も、人伝いの情報で3月15日から2週間ほど、山形に避難した。

吉田：

どこの避難所も被災者でいっぱい、山形の方はあいているよ、という人づての情報で自主判断で移動した。

住んでいた町と原発は近かった。今までも何かあったら大変なことになるという認識はあった。息子だけでも遠くに逃がした方がいいという思いはあった。

鈴木：

事故前は原発は安全だというだけで、被ばくについて、教えてもらうことはなかった。

吉田：

東電職員の家族を監視しろという話があった。300キロ離れたら安全だ。あいつら、真っ先に逃げるから。

鈴木：

情報を隠しているのかと、疑心暗鬼になった。

フロア：

地震が起こったときはどうして下さいという、事前の情報はなかったのか。

吉田：

なかった。安全については色々な情報があった。東電による電気教室というのがあり、クリーンで安全なエネルギーをアピールしていた。

フロア：

ボランティアで東北に行ったときに何を話し、どう接したらよいかわからなかった。

鈴木：

大事なのは関係性だと思う。東北の人は感情を表に出しにくい。本音を聞き出すのはむずかしい。ボランティア等に関わったときに、聞き出してほしい。ふれられたくなかったことにふれてしまい、機嫌をそこねることもあると思うが、誰かに聞いてほしいという思いもあるので、少しずつ反応を見ながら聞き出してほしい。

吉田：

本当は聞いてほしいという人は多い。一人ひとりドラマがある。聞いてもらうことで安心する。

フロア：

県外の人間に対して、憤りを感じたことは？

吉田：

県外の人にはあまりそういう感情はなかったと思う。被災者の中の一部の態度の悪い人、だらしない人へのいら立ちがあった。住民間の軋轢があった。

鈴木：

ネット上で勝手な意見を発信し、理解しようとしていない人、相手の心を想像するする力が足りない人へは怒りを感じたことはあった。遠くにいればいるほど、関心を持ちにくいのもわかる。

3. 問題だと感じていること

吉田：

問題に感じていることは、原発事故は終わっていないのに終わったかのような風潮が危ないと思う。原発事態は収まっていない。凍土壁は未完成のままであり、汚染水は毎日大量に出ている。福島のお米や牛乳が敬遠されている。出荷している水田の隣には放射性廃棄物の山がある。全部の米の袋を検査し、一番安全な米だと思う。でも実際には敬遠されている。

家から原発までの距離で、補償金をもらえる人ともらえない人が決まっている。「あいつらは、いいよな」といった、住民間での軋轢がある。

自分の中では終わっていない。仮の生活をしているという感覚があった。

鈴木：

大人に対する怒りはあった。もっと色々なことを教わっていたらと思った。考えることはしんどかった。放射線被害について、情報を出すことに責任があると思っている。本当は大変なことが起こっている、ということを知ってほしい。知ることを放棄したら終わりだ。無関心は恐ろしいことだと思う。

河本：

震災という言葉についてだが、福島に関しても、東日本の津波被害についても終わっていないと感じている。人の心の問題、お金にまつわる軋轢、はてしない問題だ。情報、知ることの大切さ、知ろうと思うことの大切さ。メディアリテラシーを意識し、いろいろ自分から知ろうとすることが大切だ。終わったと感じることは危ない。

フロア：

何をもって終わると思われるか。

吉田：

原発事故が終息すること。放射能の垂れ流しがなくなること。

復興、心の復興、安心・安全、以前のような当たり前の生活を取り戻した時。

鈴木：

一人ひとり違くだらうけれども、終わりはないんじゃないかと思う。

渡邊伸一（奈良教育大学 教授・社会学）：

これまでも、水俣やイタイイタイ病、阪神淡路大震災など様々あったが、終わった事例というものはあるのだろうか。なぜ終わらないのか。具体的に放射能被害を受けたわけではないけれども、避難

していること自体が被害だ。被害を小さくとらえているのではないか。本人には何の落ち度もないにもかかわらず、人生を変えられたという被害、これはお金では測れない。そこまでして原発で電気をつくる必要はあるのか、と思う。

鈴木さんが高校生のころに作成した映像作品の視聴

